

妻の友の支え「地獄に仏」

殺害された上智大生の父語る

被害者支援シンポ

犯罪被害者の生活をどう支援していくかを考えるシンポジウム「被害者の声を聴こう」が14日、上智大学で開かれた。留学直前に自宅で殺害され放火された上智大4年生・小林順子さん（当時21）の父親・賢二さん（73）も参加。事件から23年たっても犯人を突き止められない無念さと、被害者支援の乏しかった時代に妻の仲間たちに支えられた経験を語った。

シンポジウムは、「被害者 伊藤富土江・上智大教授らが創る条例研究会」と、の研究チームの共催。3人

の遺族が、弁護士や被害者支援センターから受けた支援などについて語り、それを受けて討論した。

小林賢二さんはまず、娘が通った大学で話すことについて「非常に感慨深いものがあります。娘がここに呼んでくれたんだと考えています」と話した。

事件が起きたのは1996年9月、葛飾区柴又で。会場の学生たちの多くは事件後の生まれだ。「古い事件ですが、今も克明に記憶しています」と小林さん。出張先の福島から帰る新幹線のデッキで、電話で娘の死を知ったことなど、直後の状況を克明に話した。

警察で聴取を受け、「今日はこのくらいにしましょう。明日は現場検証で、消火活動で水びたしだから長

靴を用意してきてください」と夜、解放されてから、帰る家が無いことに気づいてがくせんとした。助けてくれたのは、妻のママさんパレーの仲間。「うちに来ない？」と声をかけてくれて「地獄に仏だった」。「一晩だけ世話になろう、明日のことは明日考えよう」と、家族で転がり込んで1週間ごやっかいになった。大変ありがたかった。娘の死を知った妻は「半狂乱に」。のちに都心の病院まで妻がカウンセリングに通うときも、パレー仲間が付き添い、家に妻がいるときは仲間です。ローターションを組み、ひとりにならないように居てくれた。そのおかげで自分は安心して職場復帰できた話し、身近な支援の大切さを伝えた。

「いまだに、なぜ娘が、と謎が解けないまま23年たっている。いまも捜査が続いていることが、私たち家族の生きがいです」

（河原理子）



くなくなった小林順子さんの映像を背に話す、父親の賢二さん（左）14日、上智大学